
兄弟物語(2)テレビ編

清春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

兄弟物語（2）テレビ編

【Nコード】

N6079D

【作者名】

清春

【あらすじ】

中学生のシユウには大学生の兄、高校生の姉、そして小学生の弟がいる。チャンネル争いはどこの家庭でもきつとあるはず。

ちょっと周りのヤツに確認したくなることって、ないか？

例えば、お前んちの姉貴は弟に対して無慈悲に暴力振るってるものなのか？とか。

小学生の弟が家族愛を描いたホームドラマを見て鼻で笑うのか？とか。

兄貴が……ピアスやらの金属モノをじゃらじゃら身体に付けてる、認めたくないがそこそこモテる兄貴が！

「あ、シュウ。お帰りー」

「……………」

派手なピンクのエプロン（ポケットは大きなチューリップ型）着て、弟の帰りを玄関まで迎えにくるのか？とか……………。

「おい、シュウ！ただいまの挨拶はちゃんとしろよー！」

いやまあな、夕食作ってくれるわけだし、料理の腕も家族で一番だしな。感謝している訳ですが。

「ちょっと、シュウくん？」

いや、それでもだからといって、ピンクのエプロンを着る必然性はないだろう。家には他にも地味なエプロンがある。

「シュウー、シカト？シカトのつもり？」

だいたい、チューリップのポケットって何だよ。そのまま幼児の前にでたら、犯罪者になり下がりそうだ。それともポケットがクマさんとかウサギさんとかじゃないだけマシなのか？

「ちょっとー、ルリー。シュウが可笑しいんですけど。直してやってくれー」

「ああ、兄貴！いたんだ！！だたいまッ！！！！」

俺はそのまま全速力で自室に逃げ込んだ。姉貴なんか「直された」ら、逆に壊れちまう！

鞆を畳の上に放り上げると、俺はそのまま寝転んだ。帰ったばかりだからまだ家の中の温かさを感じられる。じきに身体が慣れて寒くなるだろうから、そのときは諦めてコタツに入ろうではないか。

しかしなー。暖房器具がこの家に一つ　コタツしかねあって、ありえなくないか？

このご時勢エアコンもストーブもないって……。囲炉裏じゃないだけ良いんだろうか。

自分の家が貧乏だと思ったことはあまりないが、だからといって、生活用品の不足を考えると、友人たちよりはやはり不憫な身であったりするのかもしれない。

とはいえ、親父が男一人で四人の子供を育ててきてくれた訳だし、わがまま言ってられねえんだけどさ。

少々俺が感傷に浸っていると、襖をボスボスと叩く音が聞こえた。わざわざ「ノック」をするヤツは、あいつらの中で一人しかいない。

「どーした？タケル」

案の定、弟のタケルが襖から顔を出した。

「シュウ兄、今暇だよね？」

「今暇かな？」とかじゃないのかよ。可愛げねえな。

俺は体を起こすとタケルを部屋に入るように促した。

「どうした？恋の悩みか？クラスのマドンナに嫌われでもしたか？いいぜ、特別兄ちゃんが相談に乗ってやるぞ？」

「あはは。シュウ兄って本当に想像すること陳腐だよね」

……………俺が傷つかないとも思っているのだろうか、この

小学生^{ガキ}は。

「ま、そんなどうでもいい事おいといて。あのさ、シユウ兄ってかなり意外だけど手先器用でしょ？先々週くらいから、図工の授業で版画やってるんだけど、提出が明後日なんだよね。ほとんど終わってるんだけど、どうしても上手く彫れないところがあるんだ……」

うーん、ちょっと頭にきた言葉がなくもなかったが……。確かに、タケルがおずおずと差し出した木版を見れば、一部だけ削られてない部分がある。版画自体はどうやら校舎を題材としたものらしい。

タケルが相談してきた部分は、校舎の時計の部分。

「つーか、タケル細かすぎだろ。こんな細かきや、彫りづらいのも当たり前だぜ。……まあいいや、ほれ、彫刻刀貸せよ」

そう言うとタケルはぱつと顔を輝かせた。俺の部屋を出るとすぐに小箱を持って戻ってきた。

いつもそーゆー顔してりゃあ良いのにな。

とはいえ、俺は小学生の作品に手をつけるつもりはない。

タケルに彫刻刀を持たせ、教えてやるのが兄貴ってもんだろ。

「うわー。詐欺ー」

眩きだった^が聞こえてるぞ！

俺らが畳の上を木屑で散らかしていると、夕飯で呼びに来た姉貴

に、なぜ新聞紙の上でやらないのかと怒られてしまった。

「タケル、版画終わりそー？」

「うん、多分。でも、シユウ兄は手先器用だけど、口は不器用だから大変だよ」

「てめえ……」

人に助けを求めておきながらその言い草はないだろ！

俺が自分のコロッケに箸をのばして掴んだところ、なぜかその動きが止まった。

「……………知ってるか、姉貴。合わせ箸はマナー違反だ。しかも俺は姉貴にコロッケを譲ってやるうなどという気持ちは一切ない」

相変わらず俺の左にルリはいやがる。ソイツはグロ……………テスクミたいな名前の、テカテカするリップ？をした唇の端を、くいと上げた。

「やだなあ、シユウ。お姉様は今日の体育で疲れてるの。それを差し上げようっていう兄弟愛はないのかしらー？」

「ないない。俺の心のどこにもねえ。いや、心の隅っこに置いてある生ゴミ置き場を漁れば、腐ったその『愛』とやらが見つかるかもしれないな」

バキッ。

「あいつさー、口が不器用って言うか、ある意味器用なんじゃないのー?」

「器用なんて言わないよ。あれじゃあ世間を渡り歩く前にボコボコにされるのが目に見えるよ」

すでにボツコボコにされてる俺はどうすりゃ良いんだ。世の中を渡り歩くなつて言いたいのか!?

暴力に負けてしまった俺は泣く泣くコロツケを姉貴に譲った。こんな社会ではきつと日本はもう将来、修羅の世界になるんじゃないだろうか。……こんな時くらいしか日本の行く末を心配しないようなダメ少年でスンマセン。

……とまあ、協調性も団結力もなさそうな俺らだが、だからこそ、こういう四人揃った時は問題が起こりやすい。

俺たちを冷氣から守ってくれるコタツ。その上には美味しい夕食。そして室内に流れるのはテレビのバラエティ番組の少しおどけた音楽………

「ちょっと、木曜のこの時間といたら、『人情侍・花の介』でしょ! タケル、チャンネル変えてよ」

……来た。

「僕はこの番組のままで良いと思うな。『花の介』ってかなり嘘っぱい時代劇で、つまらないし」

来た来たキタっ……！

「何を言うー！！いい、タケル！花の介の、あの剣さばき！！チヨーカツコいいじゃん！！あんたもあんな男になりなッ」

俺は「花の介」を思い浮かべた。確かに俳優はそこそこ売れっ子だが、かなり間抜けな役柄で、見せ場の剣さばきのシーンでさえたまに脇役にかっさらわれるという、可哀相な剣客だ。……あれにタケルがなるのはちよつと想像できん……。

本人もそう思っているのか、かなり嫌そうな顔をしている。

「オレはチヨーだっせーと思うけどなあ。だって、たまにカツラずれてるぜー、あの俳優」

「何ですって!?!」

ユージの「花の介」を貶める発言にルリは般若顔になった。

……。

そんな顔する程、好きなのか？つか、原型が分からないほど、顔の肉が盛り上がってるんですけど……。絶対人様に見せちゃダメな顔だ。……女としても、人間としても。

ユージはユージで兵だ。そのホラー顔を見ても一瞬怯んだだけだった。

……初めて兄貴を見直した瞬間かもしれない。

「とはいえ、このバラエティーもいい加減飽きるよー。……っていうか、今日サッカーやってるんだよ？普通はこれ、見るだろー！なあ、シユウ」

げっ！馬鹿ユージ！！俺に振るな！！

この、いかにも「じゃあ最後に残ったお前は、いったい誰の味方をしてくれるんだ？」的な流れはすごく嫌だ。嫌だが、三人は睨むような目つきで俺を見てくる。

「え、えーと、だな」

もちろん、四番目の選択肢はあるわけだが（俺が三人を選んだ以外のチャンネルにするという選択肢）、今その答えを導いてしまつたら、確実に「三人」の理不尽な仕打ちが俺に集中するに違いない。だからといって、「どれか」を選べるわけがない。

まさに、背水の陣とはこのことかッ！

「もちろん、シュウ兄は僕の味方だよな。こんなに可愛い弟を見捨てる訳、ないよね？」

自分で可愛いとか言うな。つーか、最後の方脅しに聞こえるのは俺の気のせいか？

「馬鹿いうなよー。シュウは一番オレのこと慕ってくれてるんだぜ。もちろん、オレと一緒にサッカー見るよなッ」

いやいや、どこをどうすれば貴方の事を慕っているように見えるんでしょうか。貴方は勘違い大魔王ですか。

「ふん、勝手に言ってなさいよ。どうせシュウが選ぶのはあだし。シュウだつてめちゃくちゃ『花の介』のファンなんだから、当たり前でしょー!!」

.....勝手にオレをファンにすんじゃねえ.....。

さてさて、俺はどうすればいい？

三人の餌食にされるか、誰かの味方について二人から非難の眼差しを受けるか……

……「誰か一人を選ぶ」、ねえ………

「はあ………」

結局は、背水の陣でも「選べない選択」が出てきた時点で、板ばさみでもなんでもない。望んでなくても、逃げる道はできてしまうのだから。

「俺、部屋に戻るわ」

その返事にももちろん三人は文句を俺にぶつけてきた訳だが、俺は耳を塞ぐように居間を後にした。

「あーあ。どーやって暇つぶすかなー」

部屋に戻っても流行のポケットゲームなんてうちにはない。時間つぶしの手助けをしてくれそうなのは、何度も読み返した漫画や友達に借りたCDくらいだ。……真面目に言えば、「勉強」などというものもあるが。

とりあえずは、一眠りでもすることにしよう。

（後書き）

短編ですが、「一応「続き」となっております。よろしく願いします。

それから、「ご意見や気になる部分がありましたらぜひご指摘してください」と嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6079d/>

兄弟物語(2)テレビ編

2011年10月4日19時03分発行